

地方都市におけるファミリーコースの変遷と都市空間の再編・変容

——津軽地域／弘前市を事例に——

代表 山下祐介（弘前大学人文学部 助教授）

委員 山口恵子（弘前大学人文学部 講師）

〔研究報告要旨〕

本研究の目的は、青森県の津軽地域を事例として、人びとのライフコースと居住地選択のプロセスの変遷について明らかにすることから、現代都市の空間構造がどのように形成されてきたのかを考察することである。都市空間の再編・変容の過程を、家族による空間の活用という視点から明らかにすることを試みる。なおここでは、生殖家族が拡大・分離・縮小していく過程を、「ファミリーコース」と呼んでおく。

本研究は、大別すると2つの調査プロジェクトからなる。1）弘前を中心とした広域圏に位置づく西津軽と中津軽から5集落を取り上げて、家族に関する調査を実施した。文献等の収集と同時に、インタビュー調査を次の3つのレベルで行った。①町村の概要について各町村の役場への聞き取り、②5地域からそれぞれひとつずつ計5つの集落を選んで、その集落の概要の聞き取り、③集落の居住者自身とその家族について、主に、教育、就業、社会移動についてのライフヒストリーの聞き取りを行った。この調査では、それぞれの地域社会の変容過程を確認し、そのなかで家族がどのように他地域を活用しながら変貌してきたかを検討した。2）弘前市内にて社会調査を行った。まず、町会史などの冊子を収集・分析した。そのうえで、17地区の住民に対して、地区の概況とそれぞれのライフヒストリーについて聞き取り調査を行った。ここでは弘前市の都市空間の変遷と居住者の社会移動の関連性について分析を行った。

以上を通じて、津軽の地域社会におけるこの半世紀間の激変を説明するためには、再生産と社会移動という2つの局面がきわめて重要であることが明らかになった。家族は家族員を再生産するが、先の再生産は、後の再生産とは異なる。例えば、新しい世代では生誕地に残るものもあるが、多くは教育、交通、雇用、制度の変容を通じて別の地域へと流出していく。元の地域社会は人口が減少し、伝統的な職業が失われ、その結果、地域社会の意味が変化していくのである。以上をふまえて、今後さらに分析をすすめたいと考えている。